The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	沖縄における性暴力と性売買 : ポストコロニアル・フェミニズムの可能性
Author(s)	玉城, 福子
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59509
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　玉城　福子　　）	
論文題名	沖縄における性暴力と性売買−ポストコロニアル・フェミニズムの可能性−

論文内容の要旨

本稿では，沖縄における性暴力と性売買をめぐる象徴的な事例を取り上げ，植民地主義と性差別の両方に注意を払うポストコロニアル・フェミニズムの観点から検討することを目的とする．具体的には，沖縄において沖縄戦や占領期の記憶として，性に関わることがいかに表象されてきたのか，そしてそうした表象のあり方が現在の性暴力被害者やセックスワーカーへの偏見や暴力の正当化にどのような影響を与えているのかという問いに取り組んだ．

第1章では，事例研究に入る前の準備として，ポストコロニアリズムとフェミニズムの理論を援用した沖縄研究を概観した．沖縄研究の前提となってきた日本への同化志向が，1990年代後半以降ポストコロニアリズム論が援用されたことで疑われるようになり，日本人への同化へ駆り立てられるプロセスや米軍基地や経済の問題の中に見出される日本の植民地主義を指摘する研究が登場した．さらに，2000年代に入ると，ポストコロニアル・フェミニズムの観点からの沖縄研究が登場し，植民地主義と性差別や性暴力の問題が切り離せないものであることが示唆されつつも，社会学的な観点から植民地主義と性差別の両方の分析は十分にはなされていないことを指摘した．これらの検討を通じて，沖縄の性売買をめぐる事象を分析するにあたり，ポストコロニアル・フェミニズムの観点から植民地主義と性差別の双方を視野に入れる必要性があることを確認した．

第2章では，日本軍「慰安婦」問題をめぐる議論において，沖縄における「慰安所」の展開や「慰安婦」がどのように議論されてきたのかを分析することを通じて，フェミニズムにおける沖縄に対する植民地主義の現れ方を明らかにした．2000年に開かれた日本軍「慰安婦」制度を裁く民衆法廷である女性国際戦犯法廷を事例に，法廷での沖縄の位置づけや法廷後のフェミニストらの議論を取りあげた．分析の結果，フェミニストらの議論では，沖縄出身者では「本土」と沖縄の差異を強調する議論が展開されており，「本土」出身者議論では「本土」と沖縄の差異には注意は払わず，「公娼」という同じ部分を強調する議論が展開されていた．差異の強調が，沖縄戦に表れた沖縄差別を問題化する一方，同一性の強調では日本と沖縄の間に存在する権力関係が後景化する結果をもたらしていると考察した．そして，同一性の強調を支えているのは，台湾や朝鮮などの近代的な国家成立後に日本に併合した地域とは異なり，琉球・沖縄への侵略の過程を軽視し，沖縄の抑圧された歴史を米軍占領期に限定するような「歴史の切り取り」と呼べる歴史観であると主張した．

第3章では，沖縄のアイデンティティに重要な要素である沖縄戦の犠牲者の表象をめぐる政治を明らかにすることを目的とし，「住民の沖縄戦」という現在ヘゲモニックな沖縄戦の語りを成長させた自治体史誌における「慰安婦」や「慰安所」の記述の特徴と変遷を分析した．その際，共感可能な犠牲者と不可能な者とが分けられていることに着目した米山リサの「共感共苦の境界線」というパースペクティブを援用した．まず，「慰安婦」と「慰安所」の記述の出現頻度を概観すると，1970年代後半に初めて登場した後，1990年代後半に増加した．次に，「慰安婦」同士の差異に注目すると，1990年代以降になって，強制連行された朝鮮人と娼婦である日本人として描き分けが成立していることが分かった．さらに，一般住民の戦争体験の描かれ方と比較すると，「慰安婦」の体験の詳細はほとんど描かれていなかった．また，「慰安所」は地域の風紀を乱す存在，個人の家屋接収の被害の象徴として位置づけられていた．考察の結果，1990年代以降，「慰安婦」問題の社会問題化の中で，「慰安婦」は犠牲者として描かれる必要に迫られた一方，「共感共苦の境界線」の狭間に置かれることで，むしろ日本軍による沖縄人の被害を強調するために利用されていたことが分かった．

第4章では，1999年におきた「沖縄県平和祈年資料館展示改ざん事件」を沖縄戦時の「慰安所」と米

軍占領下におけるAサインバー（米軍の風俗営業施設許可基準に合格したバー）に関する展示に加えられた改ざんに焦点をあてて再考した．新聞記事と行政資料をデータに用いて，「共犯化」という概念から事件を分析した．その結果，軍隊による住民への暴力だけでなく，「慰安所」やAサインバーの展示も改ざんの対象となっていたことが明らかになった．そうであるにもかかわらず，「軍隊の性」に関連の強い歴史が，沖縄の知識人らのよって展開された展示改ざん事件への批判の中で十分に取り上げられることはなかった．「慰安所」とAサインバーの展示に着目した改ざん事件の再検討からは，沖縄戦の歴史認識をめぐる軍隊の視点／住民の視点という二項対立の前提を問い直す必要性が見えてきた．

第5章では，沖縄に対する植民地主義として最も言及されることの多い在沖米軍基地問題を主題とし，反基地の姿勢を打ち出している地元紙の社説にみる性暴力事件の描かれ方の特徴や変遷を追った．子殺しや中絶の新聞記事を分析した田間泰子の枠組みを下地に分析し，米兵による性暴力への批判が，過去の事件や他地域での事件と結びつけられることで，日米地位協定や基地の存在そのものへの批判へと拡大されることが確認できた．一方で，性暴力被害者へのバッシングや性暴力をたとえにした問題発言への批判など，フェミニストがこれまで主張してきた落ち度批判や被害者ケアの提唱などの新たな形の批判も見られた．

第6章では，2000年代に沖縄で展開された歓楽街環境浄化運動の中でもとりわけ売春に対する浄化運動に焦点をあて，売春女性の排除がいかに行われたのかを考察した．警察，行政，市民団体が協働したことにより，継続的で効果的な浄化運動の「成功」が産まれたことを指摘した．さらに，歓楽街の跡地には，防衛局の予算によって福祉施設が建てられることになるというコロニアルな側面を明らかにした．

結論では，植民地主義が不可視化されている沖縄において，日本人／沖縄人の権力関係を可視化することは重要であることを論じた．また，植民地主義に埋め込まれた性差別は，より自然化，本質化されており，植民地主義に対して脱共犯化を試みている知識人でさえも，性差別は見落とされがちであることを指摘した．植民地主義の解体のためにも，性をめぐる偏見や性暴力の正当化を解体するためにも，ポストコロニアル・フェミニズムからの分析が必要であると結論づけた．

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　玉城福子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	牟田和恵
	副 査	教授	山中浩司
	副 査	准教授	辻　大介

論文審査の結果の要旨

基地問題を焦点として近年「沖縄差別」問題がアカデミズムの枠を超えて現出しているが、本論文は、それを踏まえ問題意識を共有しながらも、反基地運動や「植民地主義」批判の中に潜む性差別の問題に着目して議論をさらに深めようとする試みである。具体的には、沖縄における性暴力と性売買をめぐる事件・事象を取り上げ、ポストコロニアル・フェミニズムの観点から性差別と植民地主義の関連を分析し、沖縄戦や占領期の記憶として、慰安婦・慰安所、Aサインバー、売買春等の性に関わることがらがどのように表象されてきたか、そしてそういった表象のあり方が現在の性暴力被害者やセックスワーカーへの偏見や暴力の正当化にどのような影響を与えているかという問いを立てている。

第一部序論および第一章で具体的な分析の準備として、ポストコロニアリズムとフェミニズムの理論を沖縄研究の文脈に焦点化しながら整理し、性差別と植民地主義の双方を視野に入れた研究が求められていることを説得的に論じた後、第二部では沖縄戦時の慰安婦・慰安所に着目し、性差別に反対し慰安婦問題を告発するフェミニストたちの議論の中でも沖縄をめぐる差別は等閑視され沖縄の抑圧された歴史を米軍占領期に限定するような「歴史の切り取り」が行われていることを主張（2章）、沖縄内部においても慰安婦たちは歴史の中で「共感共苦の境界線」の狭間に置かれ日本軍による沖縄人の被害を強調するために利用されている面があることを明らかにした（3章）。第三部では1990年代以降現在に至る沖縄における性暴力や売買春に注目、1999年に起こった沖縄平和祈念館資料館展示改ざん事件で県主導で展示に加えられた変更の意味を考察、高まる批判の中でも「軍隊の性」に関わる部分は十分に取り上げられることが無かったことを指摘し、沖縄戦の歴史認識をめぐる、「軍隊の視点/住民の視点」の二項対立の前提を問い直す必要性を主張（4章）、地元紙の米兵による性暴力事件の描かれ方と変遷を追うことで、性被害が日米地位協定や基地の存在そのものへの批判へと拡大され一般化されがちなことを指摘（第5章）、そして2000年代に沖縄で展開された歓楽街浄化運動を取り上げ売春女性の排除がいかに行われたかを考察、しかもそこでは基地関連予算によって「浄化」が実現されるコロニアルな側面が存在することを明らかにした（第6章）。そして結論では、植民地主義に埋め込まれた性差別がより本質化・自然化されており植民地主義批判を行い脱共犯化を試みている知識人の間でさえも性差別は見落とされがちであることを論じた。

以上のように本論文は、沖縄が歴史的におかれた文脈と現在を接続し、現時点でのアクチュアルな状況を踏まえながら、そしてまた独立論さえも議論される現在のポストコロニアリズムの議論を十分咀嚼しながら、そこから歩を進めて新たな議論の地平を目指すものであり、理論的にもまた実践的にも貢献度の高い、オリジナリティのある興味深い知見を示唆している。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしいものと判定する。